北海道建設新聞

2017年(平成29年)10月11日（水曜日）

工法の優位性など学ぶ

アイスピグ道地域協会 管内洗浄技術セミナー

アイスピグ北海道地域協会（渡辺仁会長、会員10社）は3日、札幌サンプラザでアイスピグ管内洗浄工法の技術セミナーを開催した。会員各社の担当者ら約30人が参加し、他工法との優位性や営業活動でのセールスポイントなどを学んだ。

同工法はアイスピグと呼ばれるシャーベット状の氷を管内に注入し、汚れを擦り取り、堆積する砂や石などの夾雑（きょうざつ）物をシャーベット内に包み込んで運び、管外に排出するもの。シャーベット状の氷なので従来のピグ工法のように詰まって取り出せなくなるリスクはなく、長距離の洗浄や管の曲り、口径の変化にも対応する。

冒頭あいさつに立った渡辺会長は旭川市、苫小牧市、紋別市内でデモ施工を重ねてきた経緯などを説明し「販促ツールや技術情報などを随時提供していきたい」と話し、工法普及への協力体制を強調した。

セミナーでは東亜グラウト工業（東京）アイスピグ事業部の結城啓治部長が、洗浄手法として高圧ジェット洗浄、薬品洗浄、新管入れ替えが第1世代、ピグ工法を第2世代に分類。第3世代となるアイスピグ洗浄工法は、伏せ越しなどの曲りや管経の変化に対応することやシャーベット状の氷なので配管へのダメージを抑制できるなどのメリットを解説した。

さらに上下水道を管理する自治体担当者に加え、民間の工場配管で維持管理に苦慮するケースなども紹介。管の破損や詰まりなどのリスクのない安全性の高いアイスピグ洗浄工法は、管内洗浄という大きな需要を見込めるマーケットであることも説明した。参加者からの管経、延長による見積もりの質問には、大まかな数字としてシャーベットの使用割合による算出方法をアドバイスしていた。（企画記事）

工法技術に加え、管内洗浄が求められる現状も学んだ